

7.13 シベリア抑留の話

「八幡の語り草」第102話(85頁)

シベリア抑留により、大戦後武装解除され投降した日本軍捕虜らがシベリアに労働力として移送隔離され、長期にわたる抑留生活と奴隷的強制労働により多数の人的被害を生じた。厳寒環境下で満足な食事や休養も与えられず、過酷な労働を強要されたことにより、多くの抑留者が死亡した(約65万人抑留され、その1割が死亡したと言われている)。

そのソ連の行為は、武装解除した日本兵の家庭への復帰を保証したポツダム宣言に背くものであった。

ロシアのエリツィン大統領は、1993年10月に訪日した際に、「非人間的な行為に対して謝罪の意を表する」と表明した。

「八幡の語り草」に掲載されているシベリア抑留の体験談からも当時の様子が、うかがわれる。

知多青年会議所では、シベリア抑留で亡くなった方々の遺族の墓参をサポートすること、そして我々や子どもの時代に二度と同じ過ちを繰り返さないために、同じ名前を縁に「知多・ЧИТА(ロシア語の「チタ」)友好視察団」を過去に6回送り、7回迎え入れた。

参考図書

辺見じゅん著「収容所(ラーゲリ)からの遺書」

澤地久枝著「わたしのシベリア物語」

神渡良平著「はだしの聖者」